

論文の内容の要旨

氏名：大 屋 聖 郎

専攻分野の名称：博士（医学）

論文題名：二相性アナフィラキシーの特徴—救急外来における多施設前向き観察研究—

背景： アナフィラキシーとは、全身のアレルギー反応で、時として致命的となりうる。このアレルギー反応のほとんどは単相性であるが、なかには最初の反応の後に症状が再燃する二相性アナフィラキシーが存在する。この反応の発症頻度については0.4%から23%と報告に大きな差が存在し、またその危険因子や防御因子などの特徴についても不明な点が多い。本研究の目的は、救急外来における二相性アナフィラキシーの特徴を明らかにし、アナフィラキシーという重篤な疾患に対する適切な診療を提供することである。

対象と方法： 2016年6月から2019年5月までの3年間、国内2施設において前向き観察研究を実施した。救急外来でアナフィラキシーと診断されたすべての症例を対象とし、患者属性、病歴、臓器症状、使用した薬剤、臨床経過、契機となった物質を調査した。アウトカムは二相性アナフィラキシーの発症とし、調査項目とアウトカムの関係を統計学的に解析した。

結果： 最終的に302例が本研究に参入された。年齢の中央値は32歳（IQR 13-37）で、女性は182例（60.3%）であった。アナフィラキシーの契機となった物質で最も多かったのは食物の230例（76.2%）であった。二相性アナフィラキシーは19例（6.3%）に認められた。アレルギーの病歴や症候と二相性アナフィラキシーとの関連はなかった。治療に関しては、アドレナリンの使用と二相性アナフィラキシーの発症に関連がみられた（オッズ比 0.3（95% CI: 0.1-0.9））。ステロイド等の使用、重症例、契機となった物質と二相性アナフィラキシーとの関連はなかった。二相性アナフィラキシーの発症時間は2時間から48時間であった（中央値 10時間）。

結論： 今回の本邦初となる二相性アナフィラキシーに関する多施設前向き研究において、二相性アナフィラキシーの発症頻度は6.3%であった。初期治療においては、アドレナリンの投与が二相性アナフィラキシーの発症を抑制する可能性が示唆された。また二相性アナフィラキシーの発症時期は約半数が10時間を超える特徴を示した。従ってアナフィラキシー患者の診療においては、二相性アナフィラキシーの発症を防ぐための積極的なアドレナリンの投与と、適切な経過観察を考慮するべきである。